

新聞記事から地域に目を向け、自らを表現する教育の実践

Part 2

～ Inboundから知る新たな上越地域 ～

関根学園高等学校

1 NIE 実践のねらい

- (1) 上越地域の Inbound の取り組みを調べ、フィールドワークを行うことによって、上越地域の課題を発見するとともに、上越市にも国際化が浸透してきているという現状を知る。
- (2) (1)の取り組みをとおり、今まで気づかなかった上越地域の魅力を発見し、郷土愛を育む。
- (3) 社会問題に目を向けさせるとともに、その背景をとらえさせ、自らの意見を持たせる。
- (4) 自らの意見を SNS に投稿し、自らの意見に責任を持つことの大切さを育ませる。また、他者の投稿から多様な視点、価値観が存在することを知る。
- (5) 発表をとおり、プレゼンテーション能力を育む。

2 本年度実践の概要や実践内容

(1) 実践の概要

時 期	実 施 内 容
平成 30 年 4 月 19 日	○ NIE 実践協議会
平成 30 年 6 月 13 日	○ NIE 研修 新潟大学人文学部非常勤講師 明星大学人文学部非常勤講師 大内 斎之 様
平成 30 年 7 月 20 日	○ NIE 研修 新潟大学人文学部非常勤講師 明星大学人文学部非常勤講師 大内 斎之 様

時 期	実 施 内 容
平成 30 年 8 月 24 日 ～ 8 月 26 日	○ 東京フィールドワーク（神田外語学院） 参加者：10 名
平成 30 年 9 月 11 日	○ 上越地域（上越市・妙高市・糸魚川市・柏崎市） フィールドワーク
平成 30 年 10 月 29 日	○ NIE 校内研究発表会 指導者 新潟県 NIE 推進協議会 伊藤 充 会長 新潟県 NIE 推進協議会 土屋 修 事務局長 新潟大学・明星大学非常勤講師 大内 斎之 様 上越教育大学大学院准教授 中平 一義 様 神田外語学院講師 池田 政隆 様 共同通信社新潟支局長 長谷川健司 様
平成 30 年 5 月 7 日 ～ 9 月 17 日	○ 各グループ Facebook：Weekly Sekine に投稿

(2) 実践内容

① 実践クラス 2 年 6 組（男子 24 名女子 15 名 計 39 名：特別編成クラス）

② 具体的な取り組み

ア NIE の取り組みにあたり，文章を生徒に配布し，NIE に取り組む意義を伝え，関心を持たせた。

イ Facebook に投稿させる取り組みのため，個人情報の流出を防ぐ方法，事前に差別的な表現，ヘイトスピーチなどについての学習を行った。

a 上記を徹底するため，Facebook に投稿する前に担当教諭に投稿内容をメールで送り，チェックを受けた上で投稿することを行った。

b 生徒の個人情報流出を防ぐため，ログインの際は Weekly Sekine のアカウントを使用するとともに，個人名での投稿および書き込みは禁止とした。

ウ 投稿する際は以下の形式を用いることで統一した。

- a 取り上げた記事の記載（新聞名および日付を記載する）
- b その記事を取り上げた理由
- c 新聞に取り上げられた記事の背景
- d 自らの考え・主張
- e 新聞の見出しの写真

エ 希望者を募り，8月24日～26日の3日間にわたり神田外語学院国際ビジネスキャリア科協力のもと，東京フィールドワークを行い，東京都におけるInboundの取り組みを調査した。またその取り組みによって，東京を感じたからこそ見える「上越」に気づくことができた。（当たり前だと思っていた地元上越の再発見）

オ 上越四市のInboundの取り組みを調べ，フィールドワークを行い，10月29日（火）に親和図法を用いたプレゼンテーションを行った。

3 実践例

(1) Facebook [Weekly Sekine] への投稿

昨年同様に「生徒の視野を広げること」「生徒が自らの意見に責任を持つこと」「社会問題からその背景を推論し，その推論をもとに自分なりの考えを導き出す力を育むこと」を目的としこの取り組みを行った。

今年度は2学年での取り組みということもあり，投稿内容は全体的に深みがあるものとはなかったが，個別に見ると私たち大人でもなかなか思いつかないような視点から社会問題を考察する生徒も見受けられた。

昨年もこの報告書で述べたが，現在の生徒たちはSNSやインターネットが生活に浸透したことによって自分の興味関心がある情報のみを収集し，蓄積しているように感じる。このような状況から広い視野を持ち，多様な価値観を容認する姿勢が創られることはないだろう。

しかし，生徒たちの生活からSNSやインターネットを排除することは不可能である。であるならば，新聞とSNSやインターネットを融合させて生徒たちの視野を広げていくことが得策であろう。

今回，生徒たちの様子を見ていると新聞から得た情報を



SNS・インターネットを用いてさらに詳細に調べた生徒もいたようであった。

Facebook : Weekly Sekine

URL

<https://www.facebook.com/Weekly-Sekine-1571522396200402/>

* 昨年度からの投稿があります。御覧いただければ幸いです。

(2) 東京フィールドワーク (8月24日
～8月26日)



神田外語学院国際ビジネスキャリア科 (以下 IBC) 全面協力のもと、東京における Inbound の取り組みの実態を調査した。この取り組みをとおり、参加した生徒たちに大きな変化が見てとれた。

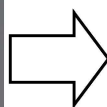
まずは IBC の学生たちとの交流をとおり、最初は引っ込み思案だった生徒がどんどん積極的に IBC の学生と関わりを持つようになり、その関わりの中で明確な自己主張ができるようになっていったという変化である。

これはその後の NIE 校内発表に向けた取り組みでも遺憾なく発揮された。そして、その姿勢に触発された生徒が増え始め、私たち教員が指示しなくても自分たちで考え、行動するようになっていった。

次に、初日の彼らの頭の中の東京と上越が、最終日には大きく変化していたということである。到着直後にワークショップとしてレゴブロックを使って、今彼がイメージしている東京と上越を作成し、その後2日間フィールドワークを行ってから再度、レゴブロックで東京と上越を作成したのだが、最終日にできあがった「東京」と「上越」はまったく別のものとなっていたのであった。

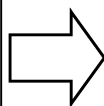


8月24日作成の東京



8月26日作成の東京

東京＝高いビルがあって、人が多くて雑駁な街というイメージで作られていることがわかる。



フィールドワークから、東京は土地が狭いため、上にも下にもきちんと計算されて街がつくられているということに気づいたことがわかる。

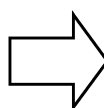


8 月 24 日作成の上越



8 月 26 日作成の上越

上越＝田んぼ・雪・人が少ないというイメージで作られている。また、自分たちが日常生活を送っている場所にもかかわらず、具体的なイメージができていないことがわかる。



IBC の学生との会話、東京を知ることによって、明確かつ具体的に上越がイメージできるようになったことがわかる。

東京に滞在している間、彼らは一切上越について調べたりはしていない。彼らが行ったことは、五感を駆使して東京をフィールドワークし、その中で IBC の学生と交流をただけである。

しかし、IBC の学生との交流の中で、今まで自分たちが当たり前だと思っていた上越、何もないと思っていた上越が他者（IBC の学生）から見れば当たり前ではなく、魅力的なものであることに気づいたのである。つまり、「自分」と「他者」の見え方（感じ方）の違いに気づいたのである。これは彼らにとっての大きな変化であった。

NIE の取り組みの一環として行った東京フィールドワークであったが生徒はもちろんだが、引率した教員も得たものは大きかった。

(3) 上越地域四市フィールドワーク（9 月 11 日）・校内発表（10 月 29 日）

それぞれのチームが半構造化インタビューを行い、その後、インタビューの結果および各自がフィールドワークで気づいたことを親和図法を用いてまとめた。

フィールドワークでは、Inbound の取り組みの実態を自分の目で確認するとともに、その土地で暮らす人々の声を聞くことによって、あらかじめ収集した情報がより確か

なものとして彼らの中に定着するとともに、自分たちが暮らす上越地域がどのような場所なのかということを再確認できたようである。

発表に向けての準備では、先ほども述べたが、東京フィールドワークに参加した生徒が中心となり、どうまとめたらわかりやすく伝えられるかを検討しあいながら親和図を作成したが、その過程をとおして、他の生徒も積極的に意志を伝える様子が見てとれた。

発表当日は、直前までプレゼンテーションの練習を各チームで行い、その中でもよりいいものを全員で創り上げようという熱意が伝わってきた。



4 成果

昨年度、今年度と新聞記事を題材としたフィールドワークを行うことによって、一つの事象から様々な気づきを促し、自分たちの現在の暮らしがある上越地域に目を向けさせることに重点を置いて取り組んできた。教科に新聞を活用するという取り組みではなかったが、一つの記事から『主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度』の育成へとつなげられた取り組みとなったのではないかと考える。

また、今後本校でも「実生活・実社会と自己の関わりの中における課題発見能力・課題解決能力の育成」を目的とした「探究」を推進していかなければならないが、その基礎となる2年間だったのではないかと考える。

「情報（知識）×行動×感性（感覚）×他者＝成長」この2年間NIEに取り組み、実感したことである。「情報（知識）」が0では、何をかけていっても0である。しかし、「情報（知識）」が多ければ多いほど、その後にくる「行動」「感性（感覚）」「他者」も多くなり、結果「成長」も大きなものとなるのではないだろうか。

生徒たちの成長の根幹となる「情報（知識）」は新聞に溢れている。それを、どのように教育の場に活用すれば生徒たちに内在する可能性、能力を引き出すことができるのか。活用の仕方に一つの答えはない。つまり、生徒の可能性を引き出す方法は答えは多数あるということだ。生徒たちの成長を促す私たちは「多くの答え」を持つために日々研鑽を積み重ねなければならないということを強く感じさせられた2年間であった。そのきっかけを与えてくださった新潟県NIE推進協議会に感謝し、2年間の取り組みを終えたい。